

二年生



三二期生

渡辺健吾わたなべけんご

研修所生活を振り返ってみると、本当にあつという間に時間が過ぎていつているのだなあ、と感じます。去年の四月に入所してから、もう一年半が経ってしまいました。「何したっけ??」と、研修所生活が濃すぎて思い出し切れない程いろいろなことがあったなーと思います。全部書こうとすると長くなるので書けません、とにかく三二期生で良かったです。研修所初の男だけの期。暑苦しいですね。八人乗りの車にぎゅうぎゅう詰めになつて座つたり、全員上半身裸で稽古をしたり。あと二ヶ月の辛抱。でも何だかんだ楽しい。

しかし、僕は一度、研修所を辞めたいとみんなに口にしたことがあります。僕は夢を捨てようと思いました。他のみんなよりも出来ないことが多く、稽古で足を引つ張つていたので、「僕は居ない方がいいんじゃないか」と思ったからです。でも、みんなが部屋まで来て、応援してくれたり、怒ってくれたり、みんなの気持ちを聞かせてくれたりしたおかげで、今も太鼓を打っている自分がいます。三二期で本当に良



かつたです。みんなありがとう。

あと二ヶ月……。自分はどれくらい成長したのかとか、あの時もつともつと頑張れた自分が居たのではないかと、とか、もったいない時間を過ごしてしまつていたこともあるなーと、正直後悔しています。その分を取り返すつもりで、さらにその倍をやるつもりで、あと少ない残りの時間を過ごしていきたいです。

音

岩井直弥いわたなおよや

私が太鼓を始めたきっかけは、小学生の頃、たまたま地元で同年代の子達の太鼓の演奏を聴いたことでした。ぼーっと立ち尽くしたまま観ていて、格好良いとか、技術が凄いとかがじゃなく、素直で、真っ直ぐな音だな、と小学生ながら感じたのと、太鼓の音がドーンと身体全身に響いて、ウズウズすると言うか、その音が好きになつて、自分もやってみたくなりました。

研修所に来ての今現在、あの時の素直で真っ直ぐな音を出したいと思つていますが、現実には難しい。舞台上立つという事は、お客様の心を揺さぶり、舞台上に夢を感じてもらふ事。それには格好良さや個性も大事だし、技術も、あれもこれも必要。素直な音とはどこから生まれるんだろう、理想と自分の現実の間で今、葛藤しています。

私は喜怒哀楽が表に出づらく、よく「怒ってる?」とか「楽しい?」とか、太鼓を叩いていても講師の方達に「本気で、全



佐渡の中学校交流公演に向けての、演目稽古。ひたすら大太鼓を打ち込む。



10月の鼓童塾最終日。濃い5日間を共にした19名の塾生さんを、バスが見えなくなるまで見送った後。演奏をやめることのできない研修生。

力で叩いてるか？」と言われます。私の中には、皆と同じくらいやっているのに、観ている人には全然伝わらない。何で？ 本当に悔しい。苛々するし、そんな自分も憎い。それでもまだ、自分を制御している自分がいるということなんだろうか。だったら、そんなものブチ破って、今は格好とか技術なんか気にしないで、感情剥き出しで、何も考えず、打って打って打ち込んで、血が出るまで、やってやりますよ。その先に私が求める音があると信じて…。



変わるモンだ

つるみりょうま
鶴見龍馬

正直な話、研修所に来ることが決まった時、まさか自分が研修生活を二年間やり通せるとは思っていなかった。よっしゃ、行くからには頑張るぞと思いつつも、どうせ一年もしないうちにキツくて嫌になって逃げ出すんだろうな、とも思っていた。僕は、辛いことや面倒臭い事が大嫌いだ。研修所に来るまでは、嫌な事からとにかく逃げていた。だって嫌な事頑張っても、それにメリットがあると思えなかつたから。け

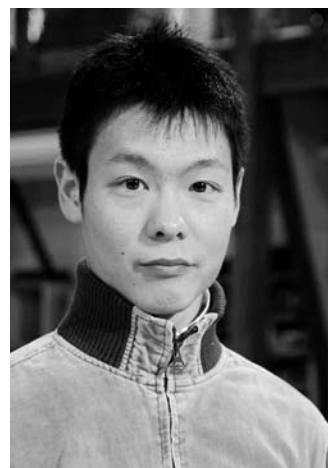
れど研修所に来て、逃げ道なんてなくなつた。辛くても、嫌でも頑張る。ただそれだけ。やめようと思えばいつでもやめられるし、何度もやめてやろうと思っただけど、そんな時、なぜか途中でやめるなんてカッコ悪っ！ て思える自分がいた。

人って変わるものなんだなあ。高校生のままの僕だったら、絶対やめていた。いつの間にか自分の中にプライドっていうか意地みたいなものができて、毎日グチグチ文句言いながらも、ここまで何とかやって来れた。僕がこんな風に変われた一番の理由は、ここまで一緒にやってきた同期のおかげだと思う。人と比べて自分だけ劣っていて才能ないのかな、なんて思っていた。自分だけキツイんだと思っていた。でもお風呂なんかでしみじみ話してみると、みんなもそれぞれに悩んでいる。僕だけじゃない、みんなキツくても必死で頑張っているんだ。そんな同期がいたからこそ、僕も一緒に今まで頑張ってきたから。この先、僕の人生どうなるか全然分からないけれど、こんな仲間もいることだし、ここまでと一緒に、まあなるようになるっしょ！



もうひとりの俺

かみやしんいちろう
神谷俊一郎



僕は研修所に来てから数回だけですが、素の自分に出会うことができました。それはどんな時かというと、大体がしんどい時です。普段は強がって見栄張って生かしていても、どうしても素が出てしまう時。研修所に来るまでは無かつたことです。ここでは表の顔だけじゃ生きていけず、表も裏もすべて出てしまいます。

その中でも、一番しんどかつた時期は、二年生の特別公演期間でした。本番中にバチを飛ばしてしまつたことから一気に崩れ、常に考え事をしながら舞台上に立っていました。本当に申し訳なくて周りの方にも迷惑をかけました。けれど、そんな時に声をかけて下さつたスタッフやメンバーの方々、そして同期の仲間。特にいつも近くで見下さっている方からの、全てを見抜かれた「どうですか調子は？」というひと言に、自分が最後まで隠していた部分全てが表に出て来て、感覚的にはギリギリ立っていたものがぐくだけ散つた感じで



佐渡特別公演終演時の送り太鼓。ベテランメンバーに導かれ、連日お客様の前に立つ。



収穫祭のお茶席。2年間の茶道の最終発表の場。しつらえや、茶碗、茶杓、お菓子、花入れなど、自作に挑戦。

佐渡には沢山の芸能があり、特に集落の祭りの中で芸能が生きています。皆さんは、佐渡の鬼太鼓というものを聞いたことはありませんか？

僕は研修生になって佐渡に来て初めて鬼太鼓に出会いました。祭りのならし(練習期間)から稽古に参加させて頂いて、稽古が終われば反省会。そこで地元の人達の鬼に対する熱い思いを聞いて、何故そこまで熱いのかとその時は思っていました。

迎えた祭り当日、朝五時の太鼓の打ち出しから、鬼打ち(鬼を踊る)の二人は鬼を打ち、祭りは夜遅くまで続きます。祭りが進むと鬼は一人で歩けなくなるほどにポロポロになります。僕は肩を貸しながら面の下からもれる苦しそうな息遣いを聞き、

鬼打ち

稲田亮輔
いなだりょうすけ

した。けれどそこから一から考え直し、何とか千秋楽には立ち直ることができました。パチを飛ばしてから出会うことになった弱い自分を最初は受け入れられず、もがいた日々も、今となってはそれも自分自身、と受け止められるようになりつつあります。二年かけてようやく出会えたもうひとりの俺を、これからも大切に育んでいきたいと思っています。

残り二ヶ月ですが、支えて下さった全ての方の顔を思い浮かべながら、ゴールまで突っ走っていきます。皆さんありがとう。「もうひとりの俺」っていうのは尊敬する矢沢永吉さんの曲からとりました(笑)。

反省会で聞いた熱い言葉を思い出していました。そして、その姿に「頑張れ」と声を掛けるのがやっとなりました。集落の人もそれぞれの思いを込め、「ソラヤレ」と囁きます。鬼が打たないと祭りが終わってしまうことを皆が知っているから、鬼は命懸けで鬼を打ち、集落の人も必死に支えるのだと思います。

立派に役目を果たした鬼打ち達がお互いに泣きながら「ありがとう」と言う姿に僕も貰い泣きしていました。その時地元の人々の祭りや鬼に対する熱い思いに自分も気付けた様に思いました。佐渡の祭りは何千何万と人が来るような大きい祭りではありませんが、集落のみんなが、その日を楽しみにしお互いに支え合っている、あつたかい祭りなんです。僕はそんな祭りや鬼が大好きなんです。



この度、新たな実地研修の二環として、研修生三年生より渡辺健吾を十二月の「交流公演」へ同行させることとなりました。準メンバーへの選考に直接関連するものではなく、研修生に実践的な研修機会を与え、その成長に寄与することを目的としたものです。



2年生の4月、研修所の地元・柿野浦集落の祭り